

とびやまじょうせき  
**飛山城跡第Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ次確認調査概報**

— 平成4～6年度 —

平成8年3月

宇都宮市教育委員会

## 序

宇都宮市は、飛山城跡が「宇都宮氏を中心とする中世下野国の歴史を理解する上で貴重な存在である」との理由により国の史跡指定を昭和52年に受けて以来、今日まで、文化庁と栃木県教育委員会のご指導とご支援を頂きながら、その保存に努めてまいりました。

特に、経済発展と開発優先の時代の流れの中で、「飛山城跡」が国の指定を受け、積極的に保護・保存して、後世に伝えることの道が開けましたことは、本市の文化財保護行政の推進の中で、大きな転換点となりました。

市民の史跡等の文化財に対する関心が高まる中、飛山城跡の公有地化が進んでまいりますと、保存から整備へとの声次第が高まってまいりました。

そこで、当教育委員会では、飛山城跡の公有化が65%を越えた時点で、飛山城跡保存整備委員会を設置し、また地元の有識者による飛山城跡公園推進懇談会のご支援を頂きながら、市民に開放された憩いの場として、また学習の場としての整備の在り方について検討してまいりました。

しかし、整備に向けての資料の収集・検討を進める中で、文献資料は白河結城氏関係文書などに限られ、飛山城跡の全体像を把握するには不十分であります。そのため、城の構造及び変遷等の資料を得ることを目的とした発掘調査を、平成4年度から実施してまいりました。

調査の結果、大型竪穴建物跡の発見や木橋跡の確認等大きな成果を挙げることができ、飛山城跡の歴史に着実な厚みをまますことができました。

本書は、これら平成4年度から平成6年度までの3か年分の調査成果の概要をまとめたものです。ここでの資料が各方面で活用いただき、栃木県中世史を考える上での一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査にあたりご指導を頂きました保存整備委員会の先生方をはじめ、文化庁記念物課、栃木県教育委員会に対し心から感謝申し上げます。

平成8年3月

宇都宮市教育委員会  
教育長 大塚 一之

## 例 言

1. 本書は、平成4年度～平成6年度にかけて行われた飛山城跡発掘調査の調査報告書である。尚、本城跡は宇都宮市竹下町392-1他に所在し、史跡整備に伴う発掘調査である。
2. 本調査は、国・県の補助金を導入し、宇都宮市教育委員会が主体となり調査を行った。調査期間は、第Ⅲ次調査が平成4年6月15日～同年11月14日、第Ⅳ次調査が平成5年9月1日～6年3月28日、第Ⅴ次調査が平成6年9月1日～7年3月22日まで発掘調査を実施した。
3. 調査面積は、第Ⅲ次調査が900㎡、第Ⅳ次調査が約1,800㎡、第Ⅴ次調査が約2,700㎡である。
4. 遺跡地における測量、写真撮影等は横堀聡、斉藤恒夫、清水豊、内海享、佐々木仁、手塚佳介の強力を得て、梁木誠、大塚雅之、富川努、神野安伸、今平利幸がこれにあたった。
5. 遺構、遺物の整理、実測等は、福田貴久栄、鈴木道子、鈴木芳子、樋口静子、大森八重子、大野節子、賀来孝代、横堀聡、清水豊、大澤順子、君島朱美、岡田由紀子の協力を得て、今平利幸がこれにあたった。また、遺物の写真撮影は、横堀聡、大澤順子、賀来孝代がこれにあたった。尚、陶磁器に関しては、国立歴史民俗博物館の吉岡康暢教授に鑑定して頂いた。また、青銅製品及び鉄製品に関しては、東京国立博物館池田宏主任研究官に鑑定して頂いた。
6. 本書の執筆は、今平が担当した。
7. 本遺跡出土の遺物及び図面・写真は、宇都宮市教育委員会で保管している。
8. 発掘調査の関係者は次のとおりである。

〔指導助言〕文化庁記念物課		田中哲雄		
	飛山城跡保存整備委員会委員	峰岸純夫	飛山城跡保存整備委員会委員	高瀬要一
	同	阿部 昭	同	塙 静夫
	同	市村高男	同	橋本澄朗
	同	大金宣亮	同	濱島正士
	同	定岡明義	同	藤本正行
〔事務局〕(第Ⅲ次調査時)	教育長	藤田昌平	文化財保護係長	定岡明義
	教育次長	近能忠良	文化財保護係	手塚英男
	文化課長	安達光政	同	梁木 誠
	文化振興係長	北条和久	同	小松俊雄
	文化振興係	湯沢孝夫	同	大塚雅之
	同	白井成志	同	神野安伸
	同	高栖良子	同	今平利幸
(第Ⅳ次調査時)	教育長	藤田昌平	文化財保護係長	定岡明義
	教育次長	近能忠良	文化財保護係	手塚英男
	文化課長	横堀杉生	同	梁木 誠
	文化振興係長	湯沢孝夫	同	小松俊雄
	文化振興係	白井成志	同	大塚雅之
	同	阿部邦男	同	神野安伸
	同	高栖良子	同	今平利幸
	同	小野敬子		

〈第V次調査時〉

教育長	大塚一之	文化財保護係長	手塚英男	国民文化祭推進班長	湯沢孝夫
教育次長	近能忠良	文化財保護係	梁木 誠	国民文化祭推進班	小林修一
文化課長	横堀杉生	同	小松俊雄	同	浜野 均
文化振興係長	桜井敬朝	同	大塚雅之	同	吉沢秀和
文化振興係	臼井成志	同	富川 努	同	関口 淳
同	高栖良子	同	神野安伸	同	秋田 靖
同	小野敬子	同	今平利幸		





〔調査補助員〕

阿久津タツ、阿久津キヨ、阿久津フジイ、阿久津陽子、阿久津みちい、阿久津正代子、荒井シゲ、荒井操、荒井セン、入江テル、入江タカ子、入江つや子、入江文字、入江通子、大橋勇、小川ミノ、小川覚治、菊地一弥、小池シズエ、坂本ヨシ、諏訪トモ、高橋ソメ、高橋清二、山中金三郎、矢島久夫、関谷ヨネ、大塚清、小松寅雄、吉沢良助、熊田胖、菱沼喜裕、高橋邦夫、三坂キヨ

9. 発掘調査及び報告書作成に関しては、次の諸機関、諸氏の御協力を賜った。記して感謝の意を表する次第である。(敬称略)

文化庁記念物課、栃木県教育委員会文化課、栃木県埋蔵文化財センター、秋元陽光、秋山隆雄、足立佳代、阿部知己、池田宏、石部正志、石塚久則、市橋一郎、大沢伸啓、齊藤和行、坂井隆、佐原真、芹沢清八、鈴木泰浩、田熊清彦、田代隆、野口静男、初山孝行、八巻孝夫、福田定信、藤田典夫、三沢正善、宮田毅、吉岡康暢、山口耕一

## 凡 例

1. 断面図基準線は標高であり、平面図の方位は真北を示す。
2. 遺構実測図の土層説明においては、次の略号を使用した。  
 ロームブロック…ロームB 今市バミス…IP 七本桜バミス…SP 鹿沼バミス…KP 焼土粒…SY  
 炭化物…C
3. 土層断面図において、 は黒色地山、 はローム層、 は鹿沼軽石層を示す。
4. 遺構平・断面図の遺物番号と遺物実測図番号とは一致する。
5. 土器実測図の  は軸の範囲を示す。

# 目 次

## 序 文・例 言・凡 例

### I はじめに

1 調査の経過と方法	1
2 遺跡の環境	2

### II 調査概要

1 第Ⅲ・Ⅳ次調査	5	② 木橋跡	5
① 堀(1号～3号堀)	5	④ 堀立柱建物跡	9
③ 竪穴建物跡	9		
2 第Ⅴ次調査	11		
① 堀(4号堀)と土橋	11	② 竪穴建物跡	12
③ 堀立柱建物跡	22	④ 溝	22

### III おわりに

## 挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡分布図	2	第10図 G-1遺構平面図	11
第2図 年次別調査区域図	2	第11図 G-1断面図(1)	12
第3図 第Ⅲ～Ⅴ次調査トレンチ配置図	3・4	第12図 G-1断面図(2)	13
第4図 1号～3号堀平面・断面図	6	第13図 ST11平面・断面図	15
第5図 ST04出土遺物実測図	6	第14図 ST11出土遺物実測図(1)	16
第6図 木橋跡遺構平面・断面図	7	第15図 ST11出土遺物実測図(2)	17
第7図 SD01出土遺物実測図	7	第16図 ST12平面・断面図	20
第8図 SB01遺構平面・断面図	8	第17図 ST12出土遺物実測図	21
第9図 ST01遺構平面・断面図	9	第18図 G-11遺構平面図	22

## 表 目 次

第1表 ST04遺物観察表	10	第6表 ST11遺物観察表(1)	18
第2表 SB01遺物観察表	10	第7表 ST11遺物観察表(2)	19
第3表 SD01遺物観察表	10	第8表 ST12遺物観察表	19
第4表 第Ⅲ・Ⅳ次竪穴建物跡一覧表	10	第9表 第Ⅴ次竪穴建物跡一覧表	21
第5表 第Ⅲ・Ⅳ次堀立柱建物跡一覧表	10	第10表 第Ⅴ次堀立柱建物跡一覧表	22

## 写真図版目次

PL 1 ① 飛山城跡全景(北西から)	PL 2 ⑨ ST11完掘(東から)
② 木橋跡(西から)	⑩ ST11(南から)
③ ST04遺物出土状態(東から)	⑪ ST12遺物出土状態
④ 調査風景	⑫ ST14遺物出土状態(南東から)
⑤ 4号堀(北から)	⑬ 小鈎出土状態
⑥ 4号堀(東から)	⑭ G-11調査風景(北から)
⑦ 4号堀調査風景	⑮ G-19集石遺構(南西から)
⑧ 土橋調査風景	⑯ 土坑遺物出土状態

# I はじめに

## 1 調査の経過と方法

これまでに飛山城跡の調査は6回行われている。

第Ⅰ次調査は、昭和52年の国指定以前で、栗林造成のために壊された城跡北東部の内堀における調査である。この後、本城跡は昭和52年3月8日付けで国指定史跡となる。この年度から早速、史跡の買い上げ事業を開始し、平成7年3月末現在で史跡の90.3%を公有化した。平成4年度から今年度までの調査は、このように史跡の買い上げがほぼ終了に近づくにあたり、今後の史跡整備を見据えて、その基礎となる資料を得るための発掘調査である。本報告においては、現在調査中の第Ⅵ次調査を抜かした第Ⅲ～第Ⅴ次調査分を報告する。因みに、昭和63年度に行った第Ⅱ次調査は、前述した栗林造成の際に埋められた外堀の調査で、この結果を基に史跡の追加指定を行い、平成2年4月3日付けでこの部分も追加指定された。

第Ⅲ次調査は、平成4年6月15日～11月14日の約5ヶ月間において、城の本丸部分と考えられるⅡ・Ⅲの曲輪の調査を行った。第Ⅳ次調査は、平成5年9月1日～翌年3月28日の半年間において、Ⅲ次調査で確認できた遺構をさらに詳しく知るために面的な調査を行うと共に、最北端のⅠの曲輪の調査も行った。尚、この年から国庫補助を導入した。それぞれの年次区域については第2図を参照されたい。

第Ⅲ次調査と第Ⅳ次調査の調査方法は、トレンチ調査により、建物跡の確認及び、2号・3号堀の規模・形態等の確認調査を行った。この結果、T-2、T-20～T-24において柱穴および堅穴遺構等が確認できたことから、翌年の第Ⅳ次調査においてこの部分を面的に広げ、遺構の規模・形態等を確認した。また、第Ⅲ次調査のT-27において、堀底から柱穴が確認できたことから、この部分に木橋が有ったものと想定され、それを確認するために、第Ⅳ次調査ではT-27を拡張し面的に木橋跡を確認した。この他に、第Ⅳ次調査においてはⅠの曲輪を囲む1号堀の規模を確認するためのトレンチを設定、調査の結果、現地表面から深さ3mもある深い堀を確認した。また、Ⅲの曲輪の西側部分においては、前年度のトレンチ調査では、遺構を把握することが困難との判断から、グリッドを設定し、面的な調査を試みた。尚、Ⅲ次・Ⅳ次調査においては、中世の遺構面が非常に浅いという観点から、掘る際には重機を使わず、最初から手掘りで調査を行った。この調査法は、破壊を最小限に食い止められるものの、トレンチ調査の上、黒色土中での遺構捜しということで、調査を進めるにおいてはかなりの困難を極めた。

第Ⅴ次調査は、平成6年9月1日～翌年3月22日の半年間において、Ⅳ・Ⅴの曲輪の調査を行った。

この調査は、前2回の調査よりも調査範囲が広く、そのトレンチの本数からして、全部手掘りで行うことは困難と判断し、前年度までの調査結果を基に、表土下30cmまでは重機により表土剥をすることにした。また、城の南と北を分ける大きな堀（以下4号堀と称す）の調査を行い、この堀を渡るための施設の確認に重点をおいた。調査開始前から土橋と考えられている場所が3か所、木橋推定箇所が1か所あり、この辺を中心に調査を行った。また、トレンチ調査により遺構の集中が見られる部分を面的に広げ、遺構の配置関係等を確認した。

基本層序は、1褐色土（表層）→2黒褐色土→3褐色土→4褐色土（ローム漸移層）→5ローム→6ブラックバンド→7ローム→8鹿沼軽石層→9ロームの準で、遺構の確認は3の褐色土中で行った。

## 2 遺跡の環境

飛山城跡は、宇都宮市の中心から東方へ約7kmに所在する。本城跡は、南北に貫流する鬼怒川左岸の段丘上に立地する。城跡の標高は130～133mで、鬼怒川の河床からの比高は約20mを測る。城跡の北側と西側は鬼怒川の浸食作用により断崖をなし、まさに自然の要害をなす。これに対し、南側と東側は人工の二重の堀により守られる。この堀と川により守られた城域は、約14haと広大である。現在、このほとんどが雑木林となっている。

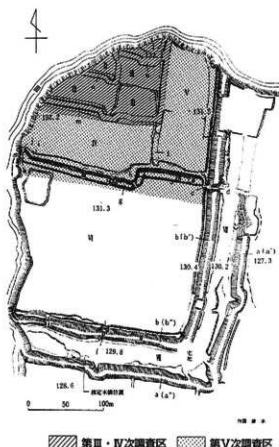
本城跡は、鎌倉時代後半の永仁年間に芳賀高俊により築城されたと伝えられている。現在までの調査の結果、この時代まで遡る遺構の確認には至っていない。

そして、南北朝期から戦国期にかけて使用され、最後は豊臣秀吉の時代、主家である宇都宮氏の改易される前後の時期で廃城となったと考えられる。これまでの調査の結果、この廃城時に土塁の一部を壊し、堀を埋めるといった作業が行われたことが判明した。

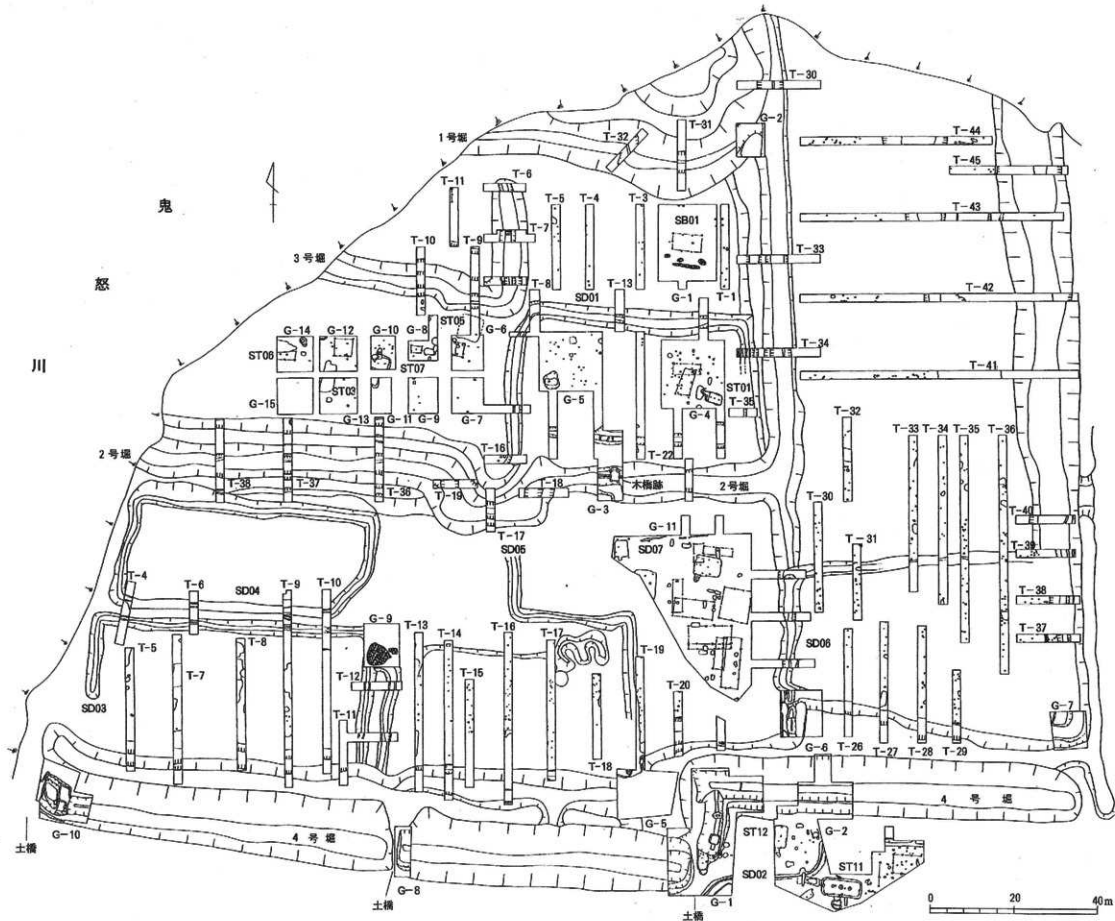
廃城以後は、寛永通宝などの遺物の存在から近世において人の出入りがあったことがわかるが、この場所を大きく変えるような工事あるいは建物が建っていた様子は今のところ窺えず、現在に至るまで雑木林として400年間の時を過ごしてきたものと思われる。なお、城跡内の数か所に、近現代の炭窟が確認できたことと、第2次大戦中の高射砲陣地の跡が有ることが確認できたことを付け加えておく。



第1図 周辺遺跡分布図



第2図 年次別調査区域図



第3図 第三～V次調査トレンチ配置図



## II 調査概要

### 1 第Ⅲ・Ⅳ次調査

#### ① 堀（1号～3号堀）

1号堀は2号堀と接続し、Ⅰの曲輪を逆L字形に囲み、南東隅に24m×6mの突出部を持つ。T-30～T-32とG-2によりその規模等を確認した。その結果、断面が薬研堀で、その規模は上幅が約5m、下幅が約0.25m、深さが約3～4mを測ることがわかった。また堀の埋土状況は、T-31の土層断面（第4図）の観察により、堀底から約60cm程（51層）がローム粒の多い砂質の自然堆積層で、その上約2.3mが人為的に埋められた層であることがわかった。その後約50cm程（I,5層）の黒色土の自然堆積層がみられる。この人為埋土層は両側から土を落とす状況が窺えるが、多くは北側（曲輪Ⅰ内側）からである。本城跡においては基本的に堀の内側に高い土塁、堀の外側に低い土塁を持つと言う傾向が見られることから、この所見はそれを裏付けるものと考えられる。このことから、土塁を復元し堀の深さを考えるならば、前述の深さに1～1.5m程加算されたものと推定できる。尚、同様の所見が他のトレンチでも確認できた。

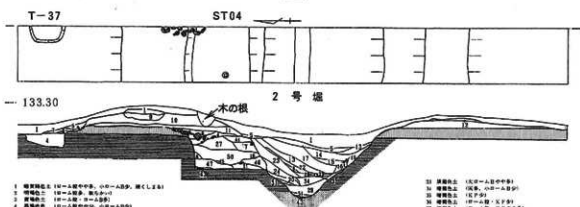
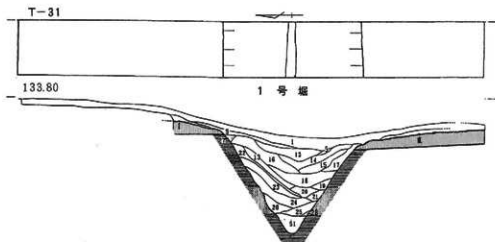
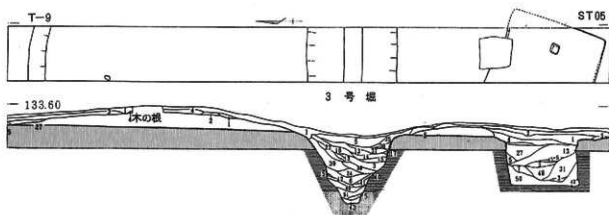
2号堀は、Ⅲの曲輪を逆L字形に囲み、南側ほぼ中央に16m×8mの突出部を持つ。T-17～T-19、T-33～T-38とG-3によりその規模等を確認した。その結果、断面が薬研堀で、その規模は上幅が約5.6m、下幅が約0.5m、深さが約2.4mを測ることがわかった。1号堀に比べると、底面が広く、深さも深くなっている分、傾斜が緩くなる。また堀の埋土状況は、T-37の土層断面（第4図）の観察により、堀底から約40cm程（28, 51, 43層）が自然堆積層で、その上約1.5mが人為的に埋められた層であることがわかった。その後約60cm程（I,5層）の黒色土の自然堆積層がみられる。人為埋土層はほとんどが内側の土塁を崩した際のものである。このような状況は、1号堀と同様に土塁を復元し堀の深さを考えるならば、前述の深さに1m程加算されるものと推定できる。

このトレンチで特筆すべき点は、竪穴建物（ST04）との切り合いが見られることである。断面図からもわかるようにST04を2号堀が切っている。尚、ST04の床面からは多量の炭と土師器皿が確認された。ST04は他の竪穴建物同様、人為的に埋め戻されていた。その埋め戻しに際し、上層に石が投げ込まれていた。

3号堀は、Ⅱの曲輪を逆L字形に囲み、南東隅に12m×8mの突出部を持つ。T-6～T-10によりその規模等を確認した。その結果、断面が薬研堀で、その規模は上幅が約3.15m、下幅が約0.5m、深さが約2.4mを測ることがわかった。2号堀と深さ及び下幅はほぼ同じであるが、上幅は1号・2号堀よりも狭い。また堀の埋土状況は、T-9の土層断面（第4図）の観察により、堀底から約70cm程が自然堆積層で、その上約1.1mが人為的に埋められた層であることがわかった。その後約40cm程（I,5層）の黒色土の自然堆積層がみられる。3号堀南側のST05は外側の土塁盛土層（3層）下であることから、3号堀と併存していなかったものと考えられる。尚、ST05も人為的に埋め戻されていた。

#### ② 木橋跡（第6図）

木橋跡は、2号堀南側中央突出部より東に10mのところを位置する。この部分は堀幅が6.4mから4.5mに狭まる場所で、堀底を20cm程高くした高まりのところに4本の柱穴が確認できた。柱穴の掘り方は平面形が楕円形もしくは隅丸方形で、上場が長軸約70cm×短軸約60cm、深さが1～1.2mを測る。柱痕も確認でき、西側には直径約35cmの木材を、東側には直径約25cmの木材を使用したものと推定される。柱穴間の距離は、東西が1.65m、南北西側が2.4m、南北東側が2.7mを測る。

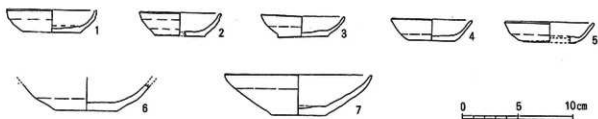


- 1 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少, 厚(1.2)弱)
- 2 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 3 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 4 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 5 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 6 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 7 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 8 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 9 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 10 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 11 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 12 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 13 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 14 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 15 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 16 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 17 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 18 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)

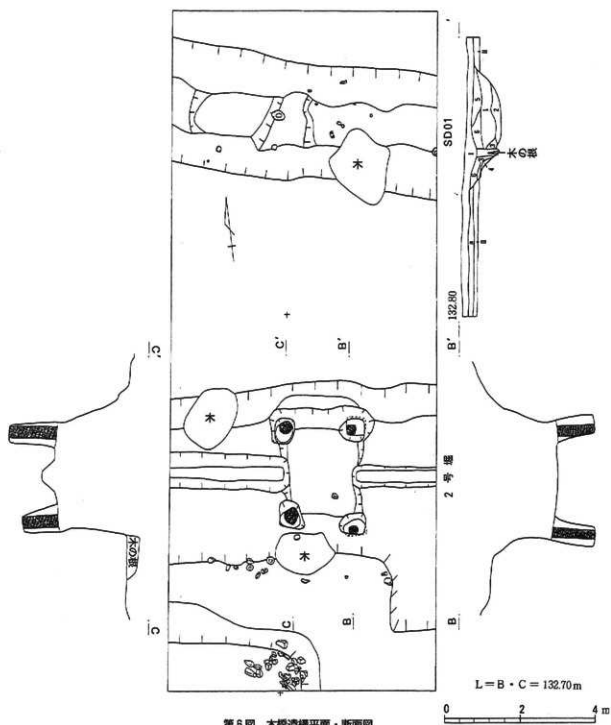
- 19 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少, 厚(1.2)弱)
- 20 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 21 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 22 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 23 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 24 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 25 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 26 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 27 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 28 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 29 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 30 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 31 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 32 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 33 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)

- 34 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 35 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 36 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 37 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 38 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 39 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 40 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 41 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 42 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 43 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 44 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 45 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 46 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 47 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 48 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 49 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 50 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 51 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)
- 52 埋戻土 (W→土層中層, O→土層少)

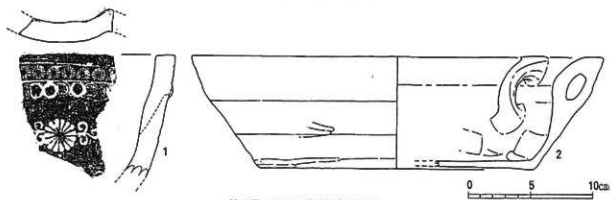
第4図 1号~3号堀平面・断面図



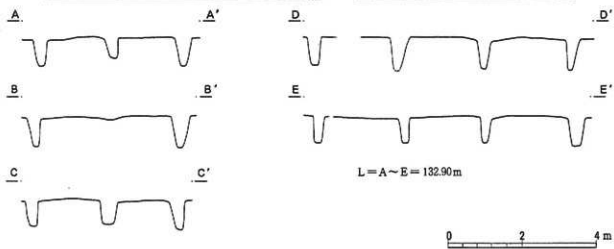
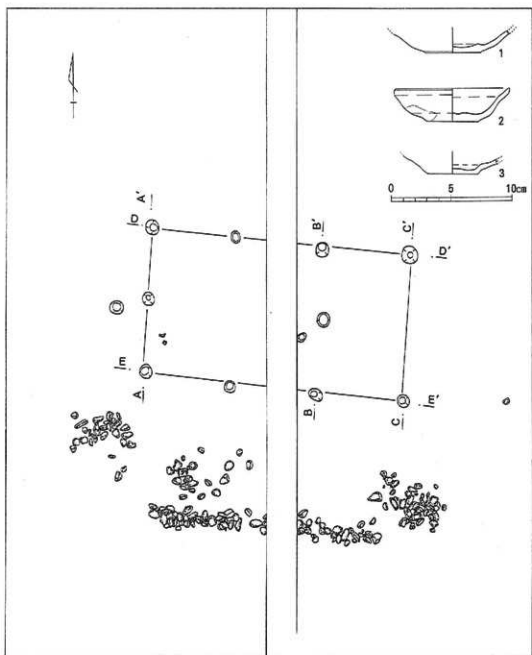
第5図 ST04出土遺物実測図



第6図 木構遺構平面・断面図



第7図 SD01出土遺物実測図



第8圖 SBO1結構平面・断面圖

この木橋跡から北に5.6mの位置に2号堀と平行してSD01が確認できた。現況調査の際に確認できなかったのは人為的に埋め戻されていた所による。SD01の規模は、上幅で2.6～3.6m、下幅1.05～1.25m、深さ約40cmである。底面はほぼ平坦であるが、一部高まりがあり、その上に柱穴が確認できた。この柱穴と木橋跡堀底西側柱穴は一直線上に並ぶ。SD01内からは古銭、内耳鍋等が出土した。

#### ③ 竪穴建物跡

第Ⅲ次・Ⅳ次調査の結果、7基の竪穴建物跡を確認した。このうちの多くは曲輪Ⅲの西側に集中する。また、ST05、ST08が3号堀にST04が2号堀に切られており、すべて人為的に埋め戻されている。主なデータは第4表のとおりである。このうち完掘したものはST01、ST07のみである。また、第5図はST04出土の土師器皿である。大小2種類があり、すべてロクロ成形である。

#### ST01 (第9図)

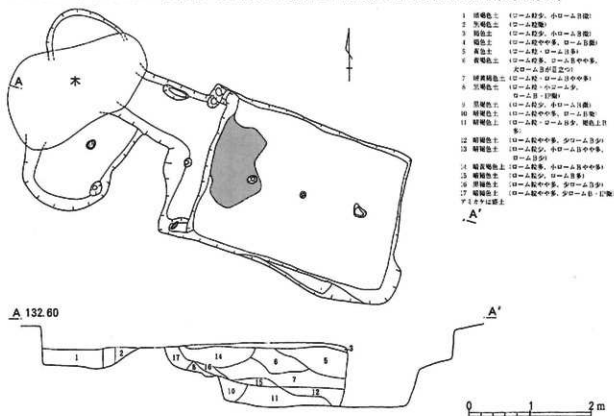
位置 G-4南東隅 重複 SK01に切られる。平面形 長方形で、短辺の一方に入口施設を持つ。規模 長軸3.9m×短軸2.4m×深さ1.0m 主軸方向 N-73°-W 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。床面 平坦 柱穴 長軸上に4本、入口部分の階段上両脇に2本 埋土状況 人為的一括埋土。網かけの部分は盛土され高くなっていた。遺物 床面より古銭が7枚、埋土中より小札、土師器皿が出土。

#### ④ 掘立柱建物跡

第Ⅲ次・Ⅳ次調査の結果、8棟の掘立柱建物跡を確認した。曲輪Ⅰは崖ぎりぎりのため調査できなかったが、曲輪Ⅱ・Ⅲに散在して確認できた。

#### SBO1 (第6図)

位置 G-1中央 規模 桁行3間 6.8m×梁間2間 3.8m 柱間 桁行2.1～2.4m 梁間 1.85～1.9m 主軸方向 N-4°-E 柱穴 円形 直径25～35cm、深さ55～95cm 遺物 土師器皿が出土。備考 南側に幅50cm、長さ5.3mで直線的に石が敷かれた部分と、楕円形の石の集石が3か所確認できた。



第9図 ST01遺構平面・断面図

No	器 種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位	備考
1	土師器 甕	口 (1.2) 高 (1.8) 底 4.4	体部が内筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切りで飯目状肌を残す。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	2/3 残
2	土師器 甕	口 6.4 高 1.9 底 4.0	体部が内筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切り残ナデ。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	1/3 残
3	土師器 甕	口 6.7 高 1.7 底 4.1	体部が内筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切りで飯目状肌を残す。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	4/5 残
4	土師器 甕	口 7.0 高 1.6 底 3.7	体部が外筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部外面は回転糸切りで飯目状肌を残す。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	1/2 残
5	土師器 甕	口 6.4 高 1.7 底 4.2	体部が外筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切り。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	1/2 残
6	土師器 甕	口 — 高 1.7 底 5.0	体部が内筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切り。	褐色色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	1/3 残
7	土師器 甕	口 11.4 高 3.8 底 4.4	体部が内筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切りで飯目状肌を残す。	灰白色	微砂 砂 礫 石	良好	床面	1/3 残

第1表 ST04 遺物観察表

No	器 種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位	備考
1	土師器 甕	口 — 高 — 底 4.2	体部が外筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切り残ナデ。	乳白色	砂 礫 石	良好	跡地表面	2/3 残
2	土師器 甕	口 9.2 高 2.6 底 4.3	体部が外筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部内面ナデ、底部外面は回転糸切り残ナデ。	乳白色	微砂 砂 礫 石	良好	跡地表面	4/5 残
3	土師器 甕	口 — 高 — 底 4.9	体部が外筒気味に立ち上がる。	ワロロ成形、底部外面は回転糸切り残ナデ。	褐色色	砂 礫 赤色 スコリア 残	不良	跡地表面	2/3 残 灯明皿

第2表 SBO1 遺物観察表

No	器 種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	出土位	備考
1	瓦 首 穴 鉢	口 — 高 — 底 —	縁部削り、口縁部が削りの上方にまっすぐのびる。	外面がよく滑らか、1組目は、1条の度縁間に青花文、その下に円形浮文、体部に大きめの青花文を判読する。	暗灰色	砂 礫	良好	埋土中	1/10 残
2	内 耳 土 器	口 33.0 高 8.7 底 21.8	口縁部は平肌、体部が外筒気味に立ち上がる。	内外面ともナデ、体部下端を削る。	褐色色	砂 礫	良好	埋土中	1/3 残 外面に 飯目状

第3表 SDO1 遺物観察表

遺構名	屋 根		主 柱 穴	出入り口	出 土 遺 物						備 考	
	長軸 × 短軸 × 高さ m m m	—			銅 貨	金 貨	青 銅	鉄 貨	土 貨	其 他		
ST 01	3.9 × 2.4 × 1.0	—	4	1 (西)					○	○	○	未編 2号層に切られる 3号層に切られる 未編 珠罫?、赤鉄片 3号層に切られる
ST 03	7.0 × 2.8 × —	—	—	—								
ST 04	— × — × 1.4	—	—	—								
ST 05	— × 4.8 × 1.5	—	—	—			○					
ST 06	— × 2.75 × —	—	—	1 (東)								
ST 07	5.04 × 3.74 × 1.4	—	2	1 (北)			○					
ST 08	— × — × 1.3	—	—	—								

第4表 第Ⅲ・Ⅳ次壁穴建物跡一覧表

遺構名	屋 根		備 考
	長軸 × 短軸 m m	長軸 × 短軸 間 尺	
SB 01	6.8 × 3.8	3間 × 2間	南側に石を敷いた遺構あり      ST-06に切られる
SB 02	5.2 × 2.3	3間 × 1間	
SB 03	5.9 × 2.1	3間 × 1間	
SB 04	3.6 × 1.9	3間 × 1間	
SB 05	2.4 × 1.8	1間 × 1間	
SB 06	4.2 × 4.2	3間 × 1間?	
SB 07	— × 2.0	—間 × 1間	
SB 08	3.4 × —	2間 × —	

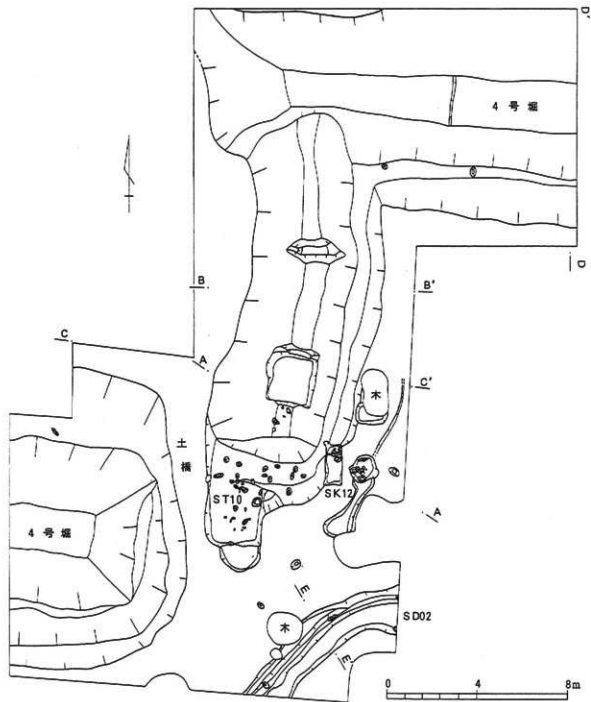
第5表 第Ⅲ・Ⅳ次掘立柱建物跡一覧表

## 2 第V次調査

### ① 堀（4号堀）と土橋

城の内堀内を北側（曲輪Ⅰ～Ⅴ）と南側（曲輪Ⅵ）とに分ける大きな堀である。G-1, G-2, G-8, G-10においてその規模を確認した。その結果、断面が箱堀で、その規模は上幅が約15m, 下幅が0.7~2m, 深さが約5~6mを測ることがわかった。

G-1は4号堀が鉤の手状に曲った「折り」の部分で、「折り」隅から対岸に斜めに架けられた大きな土橋は、地山を削り出して造られている。「折り」東側の堀底は、下幅が0.7mと狭い上に、凸凹があり、他の



第10図 G-1 遺構平面図

堀底との相違を見せる。

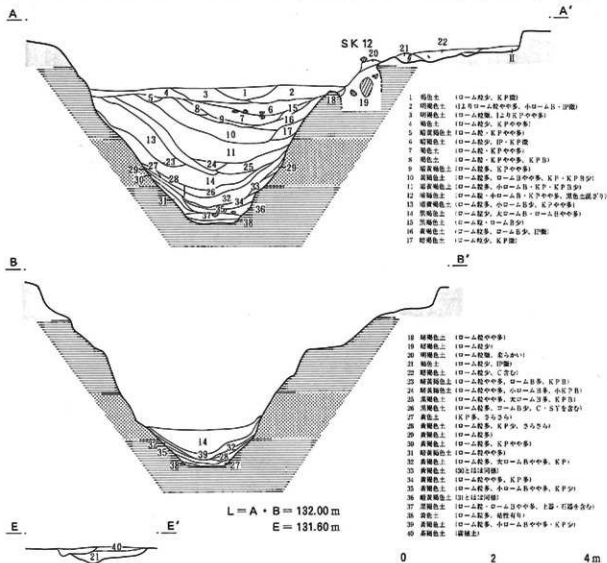
また堀の埋土状況は、土層断面（第11図）の観察により、堀底から約40cm程（27～31, 33～38層）が自然堆積層で、その上約2mが人為的に埋められた層であることがわかった。その後約60cm程（1～4, 6層）の自然堆積層がみられる。人為埋土層の多くは曲輪Ⅳ側からであることから、本来は内側の土層がもっと高いものであったと考えられる。また、2回の掘り直しが観察できた。1回目は37層が直線的であることから掘り直しの結果と考えられ、2回目は26・32層が垂直に掘り込まれている部分が観察できたことから、これも掘り直しの結果と考えられる。尚、SPA-A'等のセクション観察においてSK12, ST10を切ってこの堀が掘られていることがわかった。

堀の外側斜面中段には、幅30cmの「犬走り」と考えられる平坦面が存在する。その面で2箇所柱穴を確認した。

土橋状遺構はG-8, G-10でも確認できた。両者とも地山掘り残しによる。またその間隔は約80mである。

### ② 竪穴建物跡

第Ⅴ次調査の結果、8基の竪穴建物跡を確認した。本次調査では、ST10が4号堀に切られていた。埋土状況はST13のみが自然堆積で、そのほかはすべて人為埋土である。主なデータは第9表のとおりである。



第11図 G-1 断面図 (1)





### ST11 (第13~15図)

**位置** G-3南 重複 SK18に切られる。**平面形** 長方形で、長辺(南側)と短辺(西側)の二方向に入口施設を持つ。**規模** 長軸9.35m×短軸4.6m×深さ1.2m **主軸方向** N-° 6-E 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。**床面** 平坦 **柱穴** 長軸上に7本、南側入口部分の階段両脇に2本と先端に1本、西側入口部分の階段上両脇に2本(1本は樺持柱と兼用)と先端に1本。**埋土状況** 人為一括埋土。**遺物** 埋土中から瀬戸折縁深皿、常滑大甕、常滑片口鉢、火鉢、土師器皿、青磁碗、鉄釘、古銭、小札が出土。

**土師器皿** 大小に分かれる。小は口径7cm前後、底径4cm前後、器高1.5cm前後である。色調は乳白色がほとんどで5のみ灰白色と異質である。大は手づくね成形のものとロクロ成形のものに分かれる。前者は内面ヘラナデの痕跡が残る。後者は底部切り離しは回転糸切りで、中には板目状圧痕の見られるものもある。底部内面及び見込み部分はナデ調整。

**鉢** 20は常滑片口鉢片である。26は土師質で内面に菊花文がみられる。

**瀬戸天目茶碗** 22はロクロ成形で、回転糸切り後高台を貼り付けている。内面及び外面2/3上部に鉄軸がかけられている。

**瀬戸折縁深皿** 23はロクロ成形で、体部下方1/3が回転ヘラ削りされている。底部内面には同心円状の沈線が見られる。灰釉はハケで塗られたように全体的に薄くかかっている。尚、底部内面に煤が付着している点は注目される。

**常滑壺** 口径40~50cmのもの、25~31cmのものに分けられる。30は口縁部が受け口状を呈する。31~33の口縁はN字状を呈し、口縁縁帯幅が2~3cmである。

**青磁** 23は碗で外面に鎗蓮弁文がみられる。24は酒会壺の破片の可能性があり、断面に煤が付着している。

### ST12 (第16・17図)

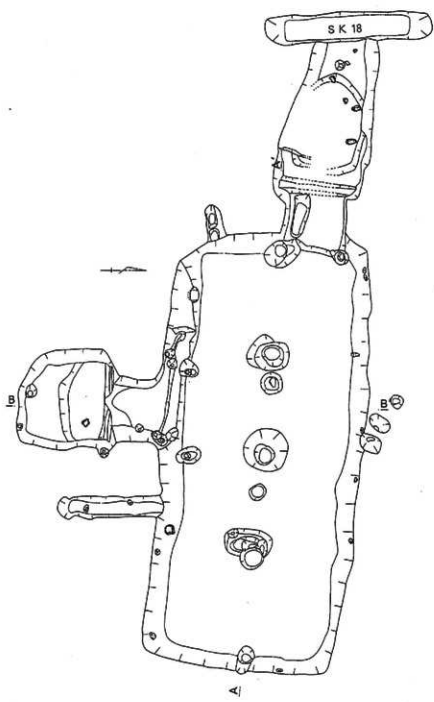
**位置** G-3北西 **平面形** 長方形で、短辺(南側)の一方方向に入口施設を持つ。**規模** 長軸5.15m×短軸2.7m×深さ0.86m **主軸方向** N-° 6-E 壁 ほぼ垂直に立ち上がる。**床面** 入口部分がやや高くなる。**柱穴** 長軸上に3本、南側入口部分に3本。**埋土状況** 人為一括埋土。**遺物** 床面から瀬戸御皿、青銅製火舎香炉、常滑大甕、土師器皿、鉄釘、小札が出土。

**土師器皿** 5~7は、口径7cm前後、底径4cm前後、器高1.5cm前後と小形である。3点ともロクロ成形で底部切り離しは回転糸切り、底部内面及び見込み部はナデ調整。

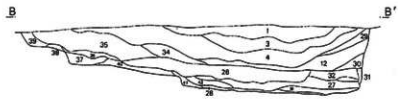
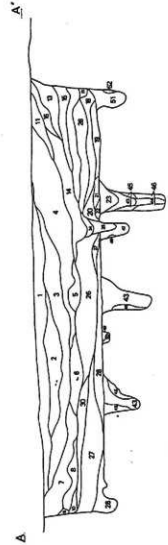
**火鉢** 4は土師質の浅鉢タイプで、底部に煤が付着するなど使用痕がみられる。

**瀬戸御皿** 2はロクロ成形で底部切り離しは回転糸切り。内面の御目はあまり磨耗していない。

**青銅製火舎香炉** 8は口径5.5cm、器高2.75cmで、幅7mm、厚さ約1mmの薄い鈔が一周する。3脚で、本体と脚は鋲留されている。



- 1 扉柱土 (ロ-A区) C・5Y黄緑
- 2 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y黄
- 3 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C中多, 5Y少
- 4 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, ロ-A区中多, C・5Y黄
- 5 扉柱土 (ロ-A区) C・5Y黄
- 6 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y黄
- 7 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y黄
- 8 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y黄
- 9 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多
- 10 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多
- 11 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C中多
- 12 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C中多
- 13 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y少
- 14 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, C・5Y少
- 15 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, ロ-A区中多
- 16 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多, ロ-A区中多

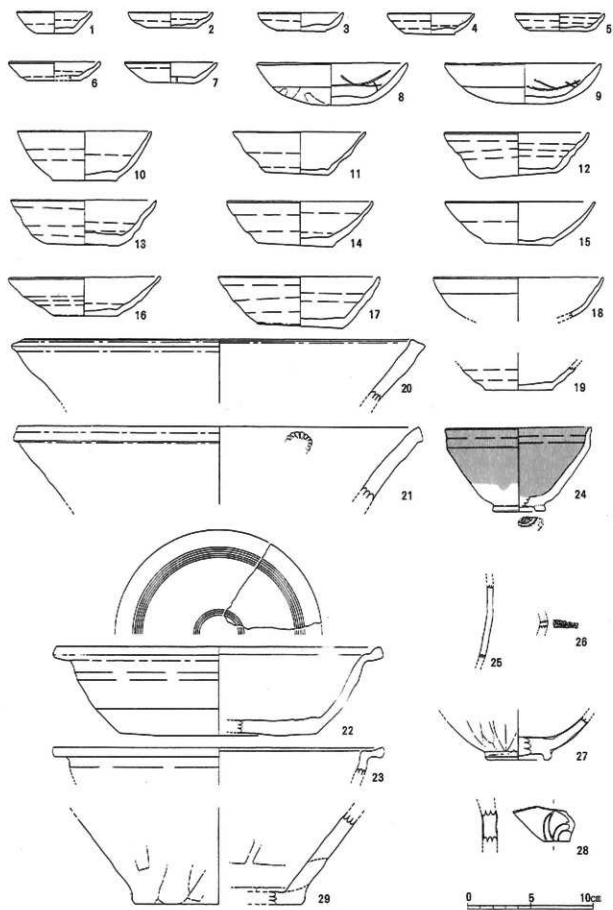


L = A · B = 131.30m

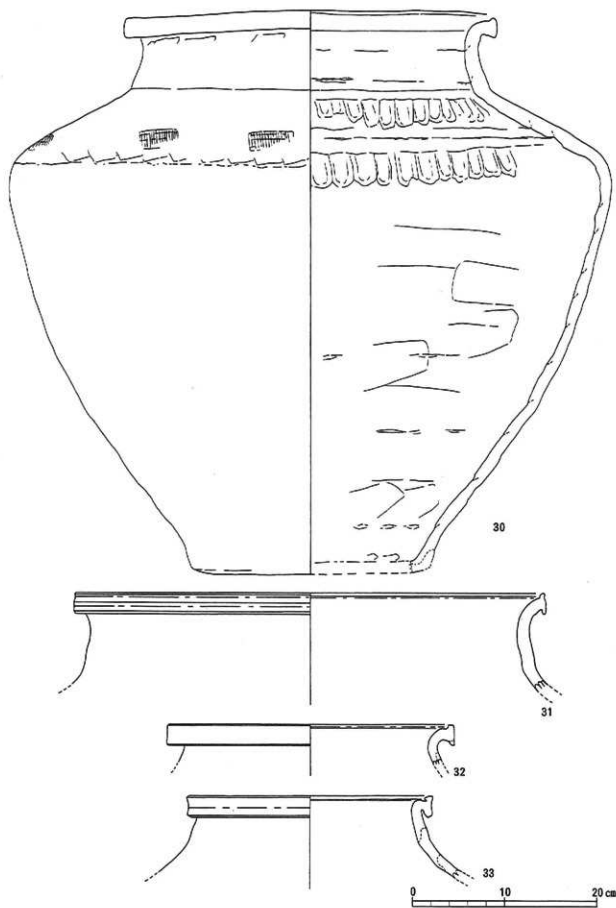
- 17 扉柱土 (ロ-A区)中多, 中中較少な
- 18 扉柱土 (ロ-A区) 小ロ-A区中多, ロ-A区中多
- 19 扉柱土 (ロ-A区) 小ロ-A区中多
- 20 扉柱土 (ロ-A区) 中多, ロ-A区中多
- 21 扉柱土 (ロ-A区) 小ロ-A区中多
- 22 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 小ロ-A区中多
- 23 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 小ロ-A区中多, 中中較少な
- 24 扉柱土 (ロ-A区) ロ-A区中多
- 25 扉柱土 (ロ-A区)中中多, ロ-A区中多, 中中較少な
- 26 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 小ロ-A区中多, 羅まっている
- 27 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 28 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 29 扉柱土 (ロ-A区)少ロ-A区中中多

- 30 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 31 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 32 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 33 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 34 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 35 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 36 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 37 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 38 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 39 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 40 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 41 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 42 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 43 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 44 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 45 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 46 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 47 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 48 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 49 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 50 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 51 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている
- 52 扉柱土 (ロ-A区)中中多, 羅まっている

第13図 ST11平面・断面図



第14图 ST11出土器物实测图(1)



第15圖 ST11出土遺物実測図(2)

№	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調	胎土	焼成	胎土質	備考
1	土師器Ⅲ	口 5.0 高 1.7 底 2.9	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	卵石 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/3 残
2	土師器Ⅲ	口 6.9 高 1.2 底 3.8	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	淡褐色	小石 卵石 赤色スコリア粒	良好	埋土中	ほぼ完整
3	土師器Ⅲ	口 7.0 高 1.5 底 4.0	体部が内傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	褐色	赤色スコリア粒	良好	埋土中	2/3 残
4	土師器Ⅲ	口 7.1 高 1.7 底 3.9	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり後、ナデ。	乳白色	小石 卵石	良好	埋土中	2/3 残
5	土師器Ⅲ	口 7.1 高 1.7 底 3.9	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり後日状圧痕を残す。	灰白色	微砂粒 卵石	良好	埋土中	1/2 残
6	土師器Ⅲ	口 7.3 高 1.5 底 4.1	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、見込み部分ナデ、底部内面は回転糸きり。	乳白色	砂粒少 卵石少	良好	埋土中	1/4 残
7	土師器Ⅲ	口 7.4 高 1.6 底 3.7	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	砂粒少 卵石少	良好	埋土中	1/3 残 底部内面に 腐付者
8	土師器Ⅲ (灯明皿)	口 12.2 高 3.2 底 —	体部が外傾気味に立ち上がる。	手づくね成形、内面ヘラナデ後、内外面磨ナデ。 底部外面ナデ。	淡褐色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/2 残 口縁に腐付者
9	土師器Ⅲ (灯明皿)	口 12.4 高 3.5 底 6.0	体部が内傾気味に立ち上がる。	手づくね成形、内面ヘラナデ後、内外面磨ナデ。 底部外面ナデ。	褐色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	ほぼ完整 口縁部内面に 腐付者
10	土師器Ⅲ	口 10.7 高 3.9 底 5.1	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/4 残
11	土師器Ⅲ	口 10.8 高 3.3 底 5.2	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	灰褐色	砂粒 小卵石 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/3 残
12	土師器Ⅲ	口 11.6 高 3.4 底 6.1	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	褐色	小石 卵石多 赤色スコリア粒	良好	埋土中	4/3 残
13	土師器Ⅲ	口 11.7 高 3.6 底 5.7	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	卵石 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/2 残 口縁部に腐付者
14	土師器Ⅲ	口 11.9 高 3.5 底 6.0	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	小石 卵石	良好	埋土中	1/3 残
15	土師器Ⅲ	口 12.0 高 3.4 底 5.2	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり後ナデ、数日状圧痕を残す。	灰褐色	卵石少	良好	埋土中	1/3 残
16	土師器Ⅲ	口 12.1 高 3.1 底 5.9	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	乳白色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	2/3 残
17	土師器Ⅲ	口 13.0 高 3.9 底 6.6	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり。	褐色	小石 卵石 砂粒	良好	埋土中	1/3 残
18	土師器Ⅲ	口 13.6 高 4.0 底 —	体部が外傾気味に立ち上がる。	手づくね成形。	乳白色	砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/7 残
19	土師器Ⅲ	口 — 高 — 底 5.3	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナデ、見込み部分ナデ、底部外面は回転糸きり後ナデ、数日状圧痕を残す。	乳白色	卵石 砂粒 赤色スコリア粒	良好	埋土中	1/3 残
20	雲片 口外	口 31.0 高 — 底 —	口縁縁部を角形に仕上げる。	体部外面ナデ後、口縁部磨ナデ。	赤灰色	白色粒 砂粒 砂粒 石英	良好	埋土中	破片 体部上 半一部
21	鉢	口 31.0 高 — 底 —	体部が外反気味に立ち上がる。	体部外面ナデ後、口縁部磨ナデ。内面ナデ。内面に、菊花文。	赤褐色	卵石 白色粒 砂粒	良好	埋土中	破片 体部上 半一部
22	麤 青 緑 瑠 璃	口 26.5 高 7.0 底 15.9	体部が内傾気味に立ち上がり、口縁部は外傾し、肩部はやや膨らんでいる。	ロクロ成形、体部下片 1/3 回転ヘラナデスリ。 底部外面以外に、気種をほどく。底部内面に、磨蝕による同心円状の沈痂がある。	オリーブ 灰 色	砂 粒	良好	埋土中	1/3 残 底部内面に 腐付者

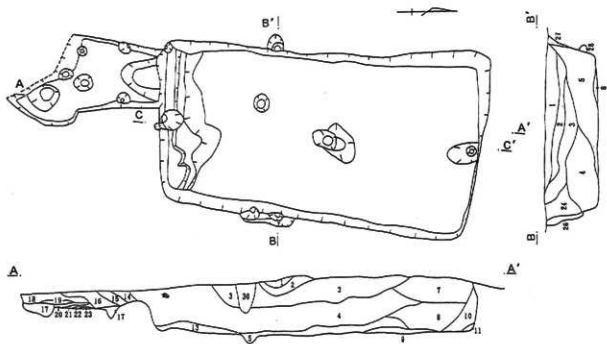
第6表 ST11 遺物観察表(1)

No	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調 ・調	胎土	焼成	出土 位置	備考
23	兼形緑釉瓦	口 高 25.6 底 —	口縁部は外折し端部はやや膨らんでいる。	ロクロ成形。	オリーブ 灰 色	磁質	良好	埋土中	破片 口縁部一部
24	天目茶碗	口 11.8 高 6.7 底 4.3	体部が外傾し、口縁部が直立している。	ロクロ成形、回転糸切り後、高合を盛り付け、内面及び外面2/3上部旋削。	暗褐色	磁質	良好	埋土中	1/6 残
25	壺			体部外面に旋削。	赤褐色	磁質	良好	埋土中	破片
26				体部外面に菊花文。	淡褐色	輝石少	良好	埋土中	破片
27	音曲粥	口 — 高 — 底 4.8		体部外面に、筋道弁文。	オリーブ 灰 色	磁質	良好	埋土中	1/5 残
28	音曲壺	口 — 高 — 底 —		外面に彫りによる文様あり。	青緑色	磁質 輝石	良好	埋土中	破片
29	空澄壺	口 — 高 — 底 13.4	体部下平外傾気味に立ち上がる。	体部下平外部ヘラナゲ後ナゲ、体部下平内面ヘラナゲ。	褐色	砂質 白色紋	良好	埋土中	破片 底部一部
30	空澄壺	口 40.5 高 50.0 底 25.8	口縁部が、受け口状を呈する。体部上平で肩が張り、直線的に底部に至る。	胴部上平に気動を施す。肩部に押印文を1段施している。	灰オリーブ 灰色 暗赤褐色	砂質 白色紋	良好	埋土中	2/3 残
31	空澄壺	口 51.1 高 — 底 —	口縁部が、N字状を呈する。	口縁部に気動を施している。	灰オリーブ 灰色	砂質 灰色紋 白色紋	良好	埋土中	破片 口縁部一部
32	空澄壺	口 31.0 高 — 底 —	口縁部が、N字状を呈する。	口縁部に気動を施している。	灰オリーブ 灰色 灰赤色	砂質 白色紋	良好	埋土中	破片 口縁部一部
33	空澄壺	口 25.6 高 — 底 —	口縁部が、N字状を呈する。	口縁部に気動を施している。	灰オリーブ 灰色 暗赤褐色	砂質 赤色 赤色スコ リア紋	良好	埋土中	破片 口縁部一部

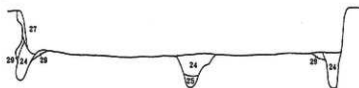
第7表 ST11 遺物観察表(2)

No	器種	寸法 (cm)	器形の特徴	調整の特徴	色調 ・調	胎土	焼成	出土 位置	備考
1	空澄壺	口 — 高 — 底 —	体部上平で肩が張り、直線的に底部に至る。	体部状況に気動を施す。胴部外面にヘラケを施している。	灰オリーブ 灰色	砂質	良好	埋土中	1/5 残
2	兼形粥	口 14.6 高 3.2 底 7.3	体部が外傾気味に立ち上がる。	体部上平外面、及び内面に気動が施されている。底部外面は回転糸切り。	オリーブ 灰色	砂質	良好	埋土中	完整
3	鉢	口 27.8 高 — 底 —	体部が外傾気味に立ち上がる。	体部外面ナゲ、体部内面ヘラナゲ。	淡褐色	砂質 輝石	不良	埋土中	1/4 残
4	火鉢	口 — 高 — 底 20.0	体部が外傾気味に立ち上がる。	径縁で体部外面ヘラケズリ、体部内面ヘラナゲ。体部外面下平ケズリ。	赤褐色	砂質 白色紋 輝石	不良	埋土中	1/5 残 底部に備付 着
5	土師器皿	口 7.0 高 1.5 底 4.2	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、見込み部分ナゲ、底部外面は回転糸切り。	乳白色	小輝石 赤色スコ リア紋	良好	埋土中	完整
6	土師器皿	口 7.1 高 1.7 底 3.8	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナゲ、見込み部分ナゲ、底部外面は回転糸切り。	乳白色	輝石少 赤色スコ リア紋 砂質	良好	埋土中	2/3 残
7	土師器皿	口 7.2 高 1.6 底 4.2	体部が外傾気味に立ち上がる。	ロクロ成形、底部内面ナゲ、見込み部分ナゲ、底部外面は回転糸切り。	褐色	輝石	良好	埋土中	ほぼ完整

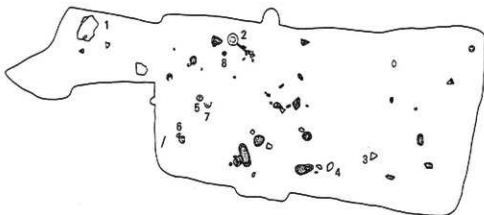
第8表 ST12 遺物観察表



C. C' L = A ~ C = 131.50 m



- |                             |                              |
|-----------------------------|------------------------------|
| 1 黑褐色土 (ローム粒少、小ローム多、C・SY散)  | 14 暗褐色土 (ローム粒少、SY散)          |
| 2 暗褐色土 (ローム粒中多、小ローム多、C・SY散) | 15 暗褐色土 (ローム粒中多、SY散)         |
| 3 黒褐色土 (ローム粒、ローム少)          | 16 黒褐色土 (ローム粒中多、C・SY少)       |
| 4 暗褐色土 (ローム粒、小ローム中多、C・SY散)  | 17 暗褐色土 (ローム粒、ローム少)          |
| 5 黒褐色土 (ローム粒、小ローム少、C中多、SY少) | 18 暗褐色土 (ローム粒少)              |
| 6 暗褐色土 (ローム粒少、小ローム中多)       | 19 暗褐色土 (ローム粒散、C)            |
| 7 暗褐色土 (ローム粒、小ローム少)         | 20 暗褐色土 (ローム粒散、硬い)           |
| 8 黒褐色土 (ローム粒少、ローム中多、C散)     | 21 暗褐色土 (ローム粒、ローム中多、硬い)      |
| 9 暗褐色土 (ローム粒中多、硬い、C・SY少)    | 22 暗褐色土 (ローム粒散、硬い)           |
| 10 暗褐色土 (ローム粒中多、C・SY散)      | 23 暗褐色土 (ローム粒多、硬い)           |
| 11 暗褐色土 (ローム粒中多、ローム)        | 24 黒褐色土 (ローム粒、小ローム中多、中軟らばり)  |
| 12 暗褐色土 (ローム粒散、軟らばり)        | 25 暗褐色土 (ローム粒、ローム多)          |
| 13 暗褐色土 (ローム粒、少ローム少、C・SY中多) | 26 暗褐色土 (ローム粒、ローム少)          |
|                             | 27 暗褐色土 (ローム粒少)              |
|                             | 28 黒褐色土 (ローム粒中多、小ローム少、中軟らばり) |
|                             | 29 暗褐色土 (ローム粒、ローム中多、中硬い)     |
|                             | 30 暗褐色土 (ローム粒、ローム中多、中硬い)     |

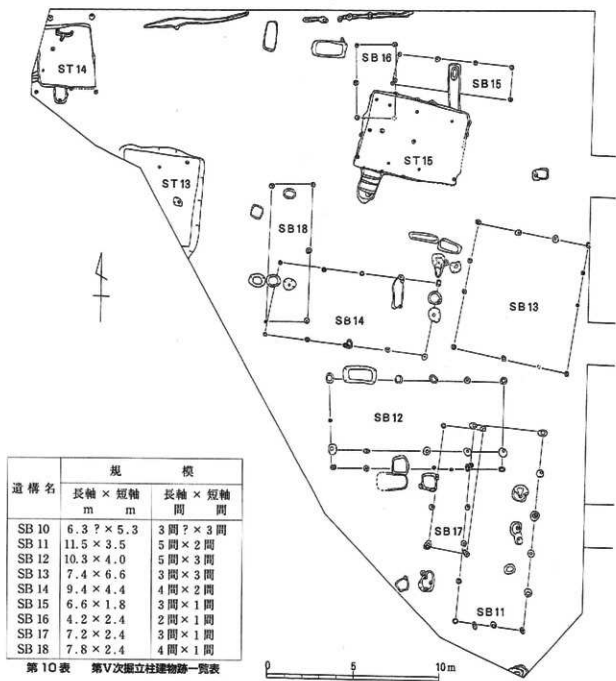


第16図 ST12平面・断面図

0 1 2 m







第18図 G-11 遺構平面図

### ③ 掘立柱建物跡

第 V 次調査の結果、9 棟の掘立柱建物跡を確認した。この他にも曲輪Ⅳの西側と曲輪Ⅴの北側を除いた部分では柱穴が比較的多く確認できている。主なデータは第10表のとおりである。

### ④ 溝

今回の調査で、区画溝と考えられるものが5条確認できた。SD02～SD04は幅が0.8～3.0 m、深さは0.2～0.45 mと浅く、SD02が断面逆台形であるが、それ以外は断面U字形を呈する。SD06は幅2.6 m、深さ2.0 mと他の溝に比べると堅固であるが、場所によっては非常に浅い部分もあり、深さは一定しない。これらはいずれも自然堆積である。

### Ⅲ おわりに

平成4年度から史跡整備に先立ち、その基礎資料を得るための発掘調査を第Ⅲ～第Ⅴ次にわたり行った結果、城跡の北側曲輪（Ⅰ～Ⅴ曲輪）の概要を把握することができた。但し、調査の目的が、遺構を確認することを主とし、トレンチによる調査としたため、全体的な遺構の広がりや把握ができたが、細かな遺構の配置及び変遷を把握するまでには至らなかった。以下、その調査結果について簡単にまとめておく。

①堀の形態は、1～3号堀は薬研堀で堀幅が3～5m、深さが復元値で3～4mを測るのに対し、4号堀は箱堀で堀幅が約1.5m、深さが復元値で6～7mと形状及び規模に違いが見られる。但し、共通点は、1～4号堀のすべてが、その規模の大小はあるが、人為的に土塁を崩し堀を埋めている点である。しかも、堀を埋めるまでの自然堆積層は約40cmと、比較的廃城に近い時期に埋め戻された可能性が高い。

②堀を渡る施設としては、2号堀ではG-3において木橋を確認し、4号堀では、G-1、G-8、G-10において土橋を確認した。

③SD01は現状でもその窪みの状況がわかるが、南辺のみ埋め戻された状況が確認できた。この埋土中より火鉢、内耳土器が出土している。火鉢は鶴岡八幡宮内遺跡Dトレンチに類例がみられる。なお、これは伴出遺物から15世紀後半～16世紀初頭に位置づけられている（鎌倉市教育委員会1995）。内耳土器は秋元氏の分類BⅢ類に当たり、宇都宮市石那田館跡、上三川町大町遺跡などに同様のタイプのものがみられ16世紀代に位置づけられている（栃木県教育委員会1975、秋元1985）。尚、この他のSD02～SD06も自然堆積である。

④竪穴建物は第Ⅴ次調査までで17基確認できた。その多くは人為的に埋め戻されており、堀や溝に切られているものがあることから、1～4号堀掘削以前の竪穴建物群の存在が想定できる。竪穴建物の時期の決定については、その埋土中に遺物が含まれることからおよそその年代を割り出すことが出来る。ST11からは、赤羽・中野分類5型式、6a・6b型式（中野1995）の常滑甕が出土している他、青磁は龍泉窯系碗など13世紀後半～14世紀初頭の遺物で、古瀬戸は中期様式Ⅲ～Ⅳ期（藤澤1995）の天目茶碗や折縁深皿が伴出している。このことから本遺構は14世紀中葉頃に位置づけられる。これに対し、ST12の銅皿は古瀬戸後期様式Ⅱ期に位置づけられ、ST11～ST12という変遷があることがわかった。尚、1341年に飛山城は南朝方の春日顯国軍により落城している。（市村1988）。

⑤掘立柱建物跡は第Ⅴ次調査までで17棟確認できた。G-11のSB11、SB12、SB17と3つの切り合いからもわかるように、2～3時期の変遷が想定できる。但し、遺物などは殆ど出土しないため、その方向などから今後変遷を検討していきたい。

#### （参考文献）

- 秋元陽光 1985 「第2節 内耳土器について」『大町遺跡』上三川町教育委員会  
市村高男 1988 「文献史料から見た飛山城の歴史と性格」『史跡飛山城保存整備基本計画』宇都宮市教育委員会  
鎌倉市教育委員会・鎌倉考古学研究所編 1995 『集成 鎌倉の発掘』第5巻 新人物往来社  
栃木県教育委員会 1975 『石那田館跡』  
中野晴久 1995 「生産地における編年について」『常滑焼と中世社会』小学館  
藤澤良祐 1995 「9中世陶器 [1] 古瀬戸」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編

## 图 版



① 飛山城跡全景 (北西から)



② 木柱跡 (西から)



③ ST04遺物出土状態 (東から)



④ 調査風景



⑤ 4号堀 (北から)



⑥ 4号堀 (東から)



⑦ 4号堀調査風景



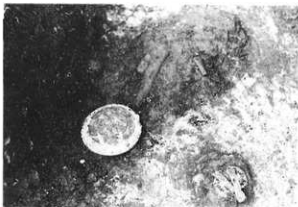
⑧ 土橋調査風景



⑨ ST11完掘 (東から)



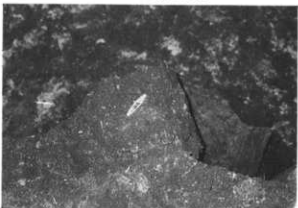
⑩ ST11 (南から)



⑪ ST12遺物出土状況



⑫ ST14遺物出土状況 (南東から)



⑬ 小鈎出土状況



⑭ G-11調査風景 (北から)



⑮ G-19集石遺構 (南西から)



⑯ 土坑遺物出土状況

---

宇都宮市埋藏文化財調査報告第38集

**飛山城跡第三・IV・V次確認調査概報**

平成8年3月発行

**発行** 宇都宮市教育委員会文化課  
(宇都宮市旭1-1-5)  
TEL (028) 632-2764

**印刷** 桒和孔堂印刷  
(宇都宮市瑞穂3-1-5)  
TEL (028) 656-5541

---